

## 論文審査の結果の要旨

氏名： 田 沼 和 紀

博士の専攻分野の名称：博士（薬学）

論文題名：認知行動療法的アプローチによる服薬支援のための薬局薬剤師対象の研修プログラムの構築

審査委員：(主査) 教授 亀井美和子

(副査) 教授 大場延浩

教授 福岡憲泰

本論文は、薬局薬剤師が精神的な健康支援の担い手として社会的ニーズを満たすためには、患者の心の痛みにも寄り添える薬剤師を養成する必要があるとの観点から、認知行動療法的アプローチ（以下、Cognitive Behavioral Therapy Approach: CBT-A）を用いた研修プログラムを構築し、その妥当性を評価したものである。本論文は3つの章から構成される。

第1章では、CBT-Aを活用した服薬支援に特化した研修プログラムを、独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの認知行動療法センターで提供されている「こころのスキルアップ・プログラム」を参考として独自に作成した。薬局での服薬支援に汎用性が高いと考えられる認知再構成法の修得を中心とした1回2時間、計4回の受講で完了する研修プログラムとし、受講者の能動的な参加と実践力の向上を図るためにディスカッションとロールプレイを多用する構成とした。また、通常の対話の中では表現されない患者の心の声を顕在化した漫画を作成し、患者の考え、気分、行動の変容を思考記録表に書き込むことにより、認知再構成法の手順を理解しやすくする工夫をした。

第2章では、第1章で構築した研修を薬局薬剤師に実施し、研修プログラムの検証を行った。2施設の薬局薬剤師24名を無作為に研修を受講する者（介入群）12名と受講しない者（対照群）12名に割り付け、介入群には2ヶ月の間に1～3週間隔で計4回の研修を実施した。研修終了1週間後に、全対象者が薬局窓口で通常行われる調剤における情報収集及び服薬指導の場面を想定した模擬患者に対するロールプレイを2症例（がんの症例、苦い薬の症例）行い、研修の前後および症例間での比較を行った。評価項目は、日本語版認知療法認識尺度を用いた習熟度、服薬支援同盟度及び心の乖離度、服薬指導に対する患者満足度、および、RIAS（The Roter Method of Interaction Process Analysis System）による発話の定量的解析とした。介入群は、研修プログラムの受講満足度、および、CBT-Aの実践意識及び実践度も測定した。これらの測定結果からは、研修プログラムの受講により、認知行動療法についての理解が深まり、CBT-Aを用いた患者支援を意識して実施することで、患者と薬剤師の心の乖離が少なくなることが示唆された。一方、薬局薬剤師が薬局の窓口で投薬時にCBT-Aを活用するためには、実際の投薬場面における検証が今後必要であると考えられた。また、研修プログラムを「ディスカッション」、「ロールプレイ」、「漫画を用いた説明」を中心とした構成としたことには高い満足度が得られたことから、これらに、服薬支援同盟度に影響すると思われる反証を導き出せない場合のアプローチ法や基本的なコミュニケーションスキルのフォローを追加することで改善すると考えられた。

第3章では、第2章で挙げられた課題を踏まえて研修プログラムの再構築を行い、研修効果の検証を行った。薬や疾患の知識の提供では問題が解決しない患者に対して、本研修プログラムを受講した薬剤師がCBT-Aを活用した服薬支援を行うことで、服薬支援時間は3分程度の延長が認められたが、薬剤師が患者の考えや気分を意識して関わり、より患者に共感した結果、患者の満足度及び同盟度は上昇し、心の乖離も減少したことが示された。

以上のことから、構築した研修プログラムは、知識の提供のみで不安が解決できない患者に対して、薬剤師が薬局でCBT-Aを活用することを可能としたプログラムであり、CBT-Aを活用した支援を行うことは、服薬アドヒアランスの向上および患者自身の否定的認知の改善に寄与することができ、必要な患者に適切な薬物治療を提供するための一助となると考えられた。本論文は、薬局薬剤師の資質向上という社会のニーズに資する実践的な研究として優れていると言える。

よって本論文は、博士（薬学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成31年 1月 17日